

2021年度スポーツ庁委託事業

「障害者スポーツ推進プロジェクト（地域の課題に対応した障害者スポーツの実施環境の整備事業）」成果報告書

2022年4月
国立大学法人弘前大学

本報告書は、スポーツ庁の委託事業として、弘前大学が実施した2021年度「障害者スポーツ推進プロジェクト（地域の課題に対応した障害者スポーツの実施環境の整備事業）」の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等にはスポーツ庁の承認手続きが必要です。

目 次

1	事業の目的	3 頁
2	事業イメージ	4 頁
3	実施体制	4 頁
4	活動報告	5 頁
5	事業成果	12 頁
6	今後の課題	13 頁
7	実行委員会名簿	14 頁
付録 1	リーフレット	15 頁
付録 2	実態調査結果	16 頁

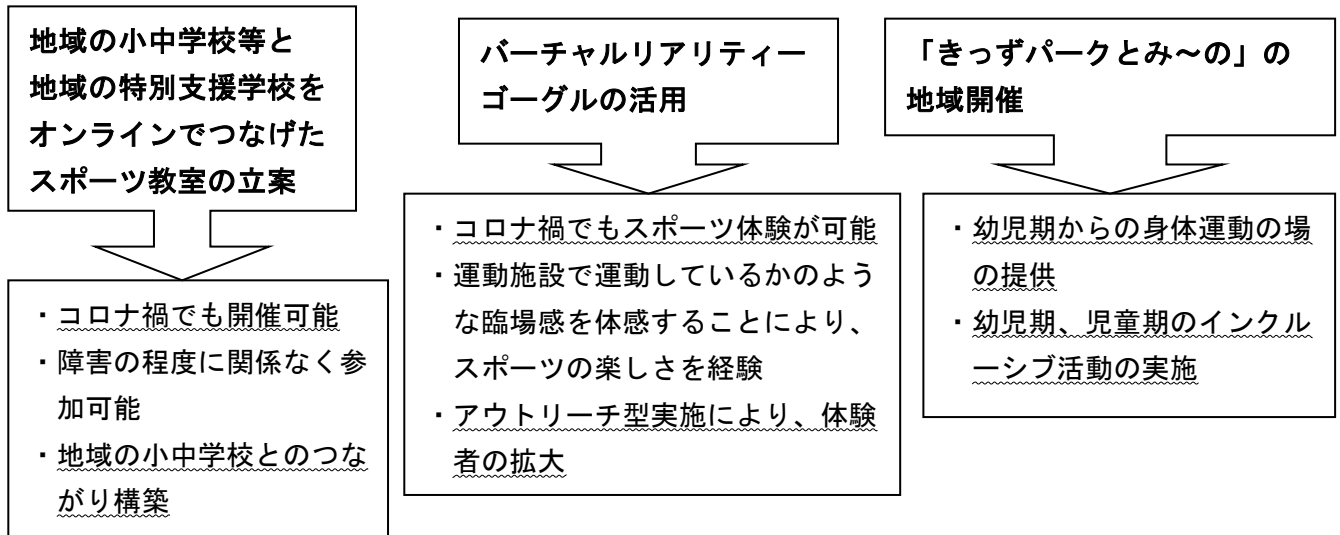
1 事業の目的

【2020年度の課題と次年度の方向性】

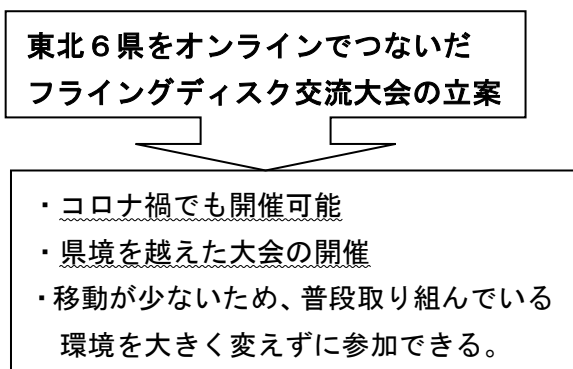
- ・新型コロナ感染拡大防止のため、集まったの活動が難しい
⇒ ICT機器を活用したプログラムの検討
- ・コロナ禍への対応と、GIGAスクール構想を見据え、すぐにはできなくても長期的にICT機器に頼っていくことも必要だろう。
⇒ オンラインスポーツ教室を試行
- ・肢体不自由の特別支援学校では、周知し参加できそうな子が限られている。医療的ケアの必要な子に看護師を配置するなどすれば、参加者も増えるだろう。
⇒ 会場に集まることが難しい方には、バーチャルリアリティー（以下VRとする）ゴーグルを使用した、視聴体験やオンラインスポーツ大会開催の検討
- ・幼児期からの身体運動の機会を提供することをねらいとする「きっずパークとみ〜の」を弘前市と共催し、馴染みのある公共施設の利用を通して、地域において行うスポーツ活動として根付かせていきたいと考えている。
⇒ 弘前市との連携強化、本校会場以外での開催

【2021年度】

ICT機器を活用した、インクルーシブスポーツ教室の開催

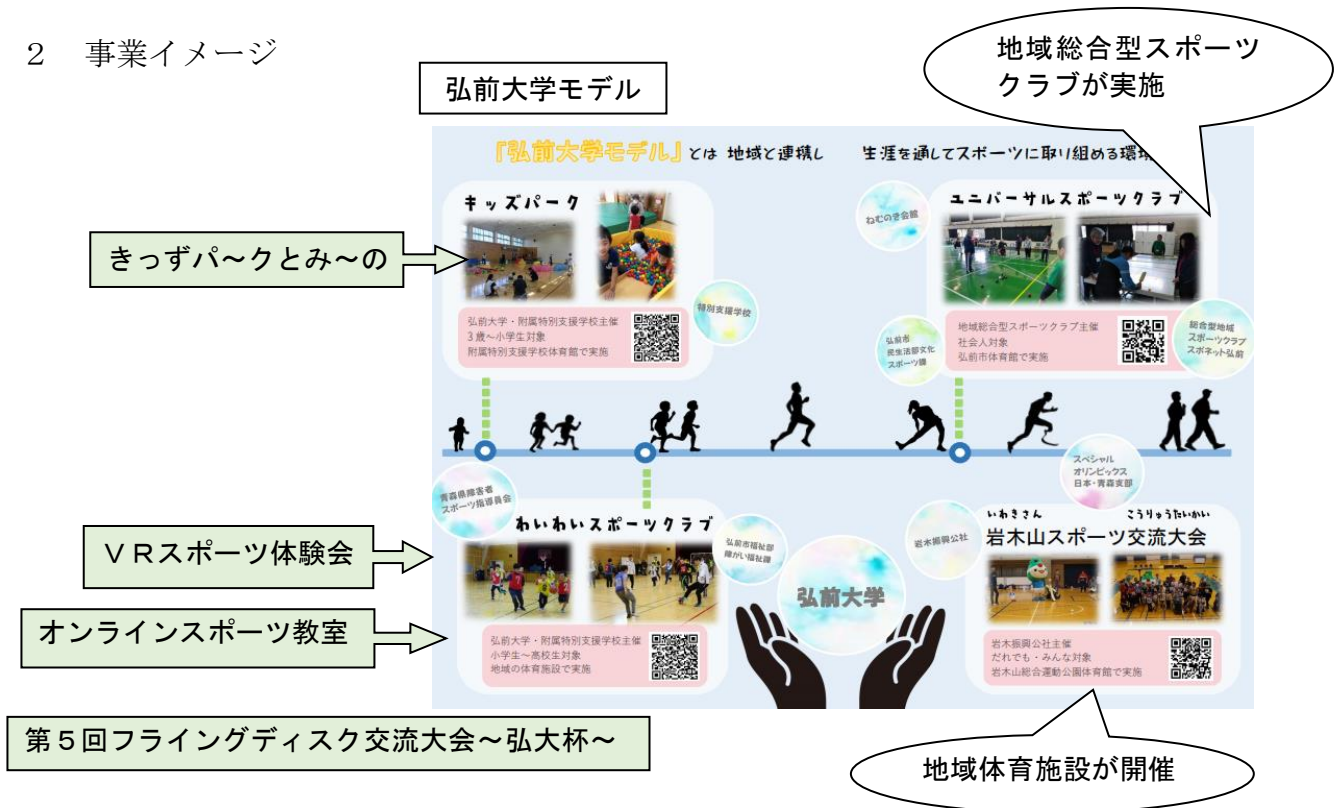


東北6県フライングディスク交流大会～弘大杯～の開催

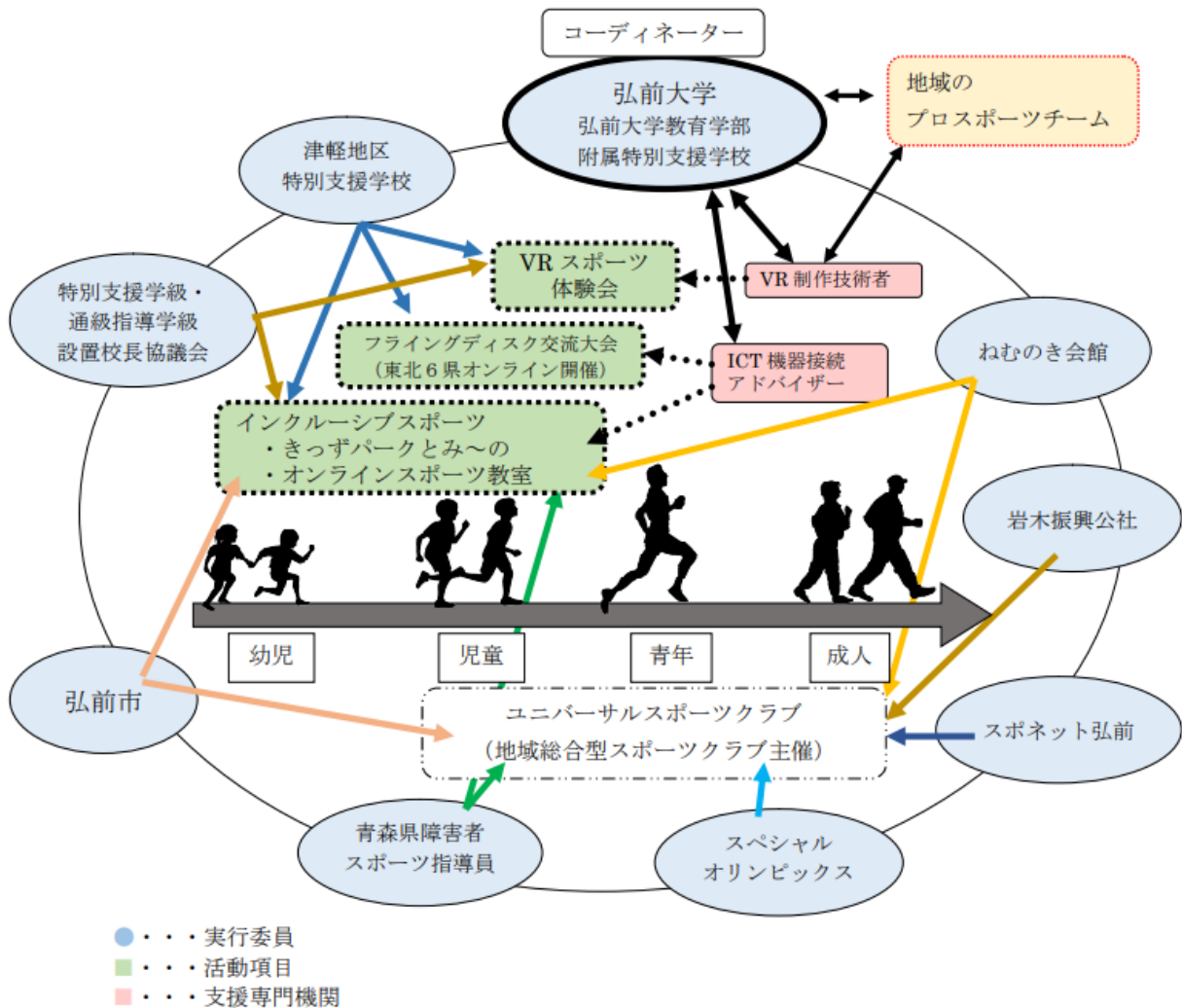


コロナ禍でもスポーツ！！
地域と連携したスポーツ！
生涯を通じたスポーツ活動！

2 事業イメージ



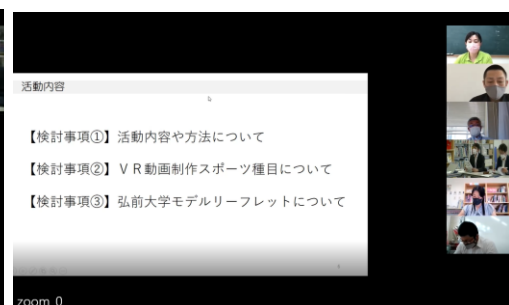
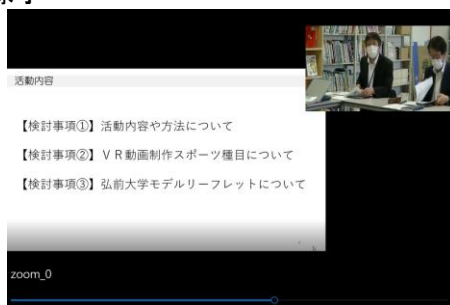
3 実施体制



4 活動報告

実行委員会

- ア) 日 時 第1回目 令和3年6月14日(月) 14:00~15:30
第2回目 令和4年2月17日(木) 14:00~15:30
- イ) 会 場 第1回目 Zoomオンライン開催
第2回目 Zoomオンライン開催
- ウ) 構成委員 弘前大学教育学部長、弘前大学教育学部事務長、弘前大学教育学部事務長補佐、弘前大学教育学部特別支援教育科准教授、弘前大学教育学部体育科講師、青森県障害者スポーツ指導員会会長、青森県身体障害者福祉センター、弘前市福祉部障がい福祉課、弘前市健康こども部スポーツ振興課、スペシャルオリンピックス日本・青森支部、スポネット弘前、岩木振興公社、青森県特別支援学級・通級指導教室設置学校長協議会弘前支部、津軽地区特別支援学校、弘前大学教育学部附属特別支援学校(事務局)
- エ) 内 容 第1回目
・令和3年度スポーツ庁委託事業「障害者スポーツ推進プロジェクト」について
・活動内容、参加方法についての検討
・コロナ禍でのスポーツ活動について
第2回目
・令和3年度スポーツ庁委託事業「障害者スポーツ推進プロジェクト」の報告
・次年度の方向性について
次年度に向けて、活動計画や実行委員の在り方
- オ) 参加者意見 【地域でのスポーツ活動に期待すること】
・身近に感じて気軽に行けるようなスポーツ活動の場
・定期的にスポーツができる場
・共生社会の更なる実現のために、障害者と健常者がスポーツを通して交流できる場
・障害者スポーツ指導員を活用したスポーツ活動
【地域で連携したスポーツプログラムの提案】
・他団体が主催しているスポーツ教室とタイアップしての「移動スポーツ教室」(移動難の課題解決のため)
・地域のスポーツ団体と連携したスポーツ教室
・定期的な活動ができる体制作り
【インクルーシブスポーツ活動の可能性】
・一緒に活動することで、健常児にとっては障害者がスポーツをすることへの理解が深まるかもしれません。ただ、障害者にとっては、不快に感じることもあると聞きます。
・参加する者全員が楽しめるような環境とするために、運営要素やハンデの活用が必要参加対象者だけでなく、そのご家族や関係者にもインクルーシブスポーツの認識と理解を促すことも重要
・公共施設に常設のポッチャコート設置など、そこにいったら、その種目が楽しめるという場所づくり
- カ) 当日の様子



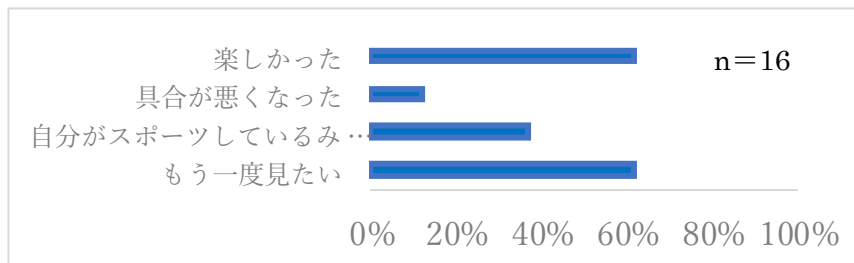
VRスポーツ体験会

ア) 期 日	1 回目	令和3年12月25日(土)
	2 回目	令和4年1月31日(月)
	3 回目	令和4年3月15日(火)
イ) 会 場	1 回目	弘前大学教育学部附属特別支援学校 第二体育館
	2 回目	県立弘前第二養護学校
	3 回目	弘前大学教育学部附属特別支援学校 第二体育館
ウ) 参 加 者	1 回目	5名(地域住民対象)
	2 回目	12名(アウトリーチ開催)
	3 回目	11名(本校高等部生徒対象)

エ) 生徒の声・様子

【知的障害児対象】

- 終わった後、架空か現実かわからなくなるけど純粋に楽しかった。
- サッカーのシュートを見て、僕もやってみたらシュートが入った。
- 画面の選手と一緒にサッカーできた。
- スポーツのルールがわかってきた。
- いろいろな目線で見れて楽しかった。



【肢体不自由重複障害児対象】

- 右手が少しだけあがった。両手をパタパタはばたかせるような動きが見られた。
- 映像が空に向かうと「あー」と声を出していた。
- トランポリンの映像時に足が動いていた。
- 歩く場面、トランポリンで足をパタパタと動かしていた
- ゴーグルをつけて右左と首を動かして周回を見ていた。
- VRの中の動きに合わせて、上を見上げたり手を前に出したりするなど、実際に自分で動いているような感覚を味わっていたようだった。
- VRゴーグルを装着しながら、周りをグルグルし映像を360度見回していた。
- 「おー!!」「すー!!」などの感嘆の声が上がっていた。
- △初めて見る物(VRゴーグル)で不安そうにしていました。
- △装着が難しかった。

オ) VRゴーグルの可能性(職員アンケートより)

疑似体験への期待

普段、走れない児童が、風を切って走るような感覚や非現実的を空を飛ぶの疑似体験ができて、楽しく学ぶことができると思い、想像力も豊かになると感じた	送風機等で風を送り、VRゴーグルで空を飛ぶ映像などを見せることで、鳥になったような臨場感で、物語(主人公の気持ちや場面)の理解をしたり、ジェットコースターに乗る映像を疑似体験をしたりすることで、解放感、爽快感を味わえる		
室内にいないが、外で活動しているかのような体験	体験できないことを見て感じることができる	臨場感あふれ、たのしく活動できる	体験という形で、色々な体験ができそう
スポーツに関しては、自分の動きと、映像がリンクするようだとより楽しむことができる	美術館、水族館、遊園地など、いろいろな施設に行く体験ができる	乗馬、スキューバダイビング、車の運転、自転車、バイク、動物に近づく	体調不良等で参加できなかった校外学習等の疑似体験
雨天時でもその場に入ったかのような体験が可能	雨天時の対応として事前活動予定の動画を視聴		

肢体不自由のある子どもたちへの利点

日常的な移動や運動が難しい子どもの運動経験の補完	移動が難しいお子さんにとって非常に有効な手段	経験や体験が少ない生徒達なのでいい
--------------------------	------------------------	-------------------

課題

リアルタイムで何がみえているのか把握できないと、「何を見聞きして、この動き、反応か」が判断できない	生徒目線本当に見ているかわからないので難しいように思う
---	-----------------------------



生徒が見ている画面を映し出しました。画面の操作は、パソコンとゴーグルをつなげて、職員が一括操作しています



VR視聴の後に、出演していたスポーツ選手と実体験



剣道や陸上の動画を見ながら、対戦や競争を体験



ドローンを使って空に飛び立つ場面



インクルーシブスポーツ

『きっずパークとみへの』

ア) 期 日	1回目	令和3年10月16日(土)
	2回目	令和3年11月27日(土)
	3回目	令和3年12月23日(木)
	4回目	令和4年1月14日(金) ※中止
	5回目	令和4年2月5日(土) ※中止
イ) 会 場	1回目	弘前大学教育学部附属特別支援学校 第一体育館
	2回目	ヒロロスクエア(ショッピングモール&公共施設)
	3回目	ヒロロスクエア(ショッピングモール&公共施設)
	4回目	B&G海洋センター ※中止
	5回目	B&G海洋センター ※中止
ウ) 参加者	1回目	7名
	2回目	16名
	3回目	3名

エ) 参加者の声

- ・楽しかった。また参加したい。
- ・冬は外遊びができないためこのようなプレイパークがあると親子とも助かり楽しい。
- ・コロナ禍でも安心して遊ばせられる場所で、楽しめた。
- ・毎回楽しみにしています。体をたくさん動かして遊べるので子供達は大喜びです。
- ・幅広い年齢の子が一緒に遊べる空間が貴重なので今後も続けてほしい。
- ・危険がないか心配だったが、見守ってくれる方がいて安心して遊ぶことができた。

オ) 当日の様子



『オンラインスポーツ教室』

ア) 期 日	1回目	令和3年9月14日(火)
	2回目	令和3年10月13日(水)
	3回目	令和3年12月10日(金)
イ) 会 場	1回目	弘前大学教育学部附属特別支援学校 県立弘前実業高等学校
	2回目	弘前大学教育学部附属特別支援学校 弘前大学教育学部附属小学校
	3回目	弘前大学教育学部附属特別支援学校 弘前大学教育学部附属中学校
ウ) 参加者	1回目	本校：19名 弘前実業高校：40名
	2回目	本校：16名 附属小学校：31名
	3回目	本校：18名 附属中学校：32名

エ) 参加者の声

- 【小学生】
- ・フライングディスクはやったことがあるが正しい持ち方は知らなかった。
 - ・すごく仲良くなれた気がしました。
 - ・画面の向こうで応援しました。
 - ・こんな機会はなかなかなくてよかった。
 - ・支援学校の方は上手でびっくりした。

- 【中学生】
- ・とても楽しかったです。難しいけれど、協力してディスクをゴールに入れることができました。
 - ・スポーツはしょうがいに関係なく一緒に楽しめるものだと思います。
 - ・フライングディスクももちろん楽しかったけれど、ディスクを投げるときにお互いに応援しあっていたところが印象に残って楽しかったです。
 - ・初めて出会った附属特別支援学校の人と、少しだけ仲良くなった気がした。
 - ・運動は人と人とのコミュニケーションをはぐくむ一つ的手段だと改めて感じた。
- 【高校生】
- ・特別支援学校の生徒さんたちとリモートで会話やスポーツをするのは、絶対に難しいと思っていたので少し不安はありましたが、やってみたら意外と特別支援学校のみなさんが盛り上げてくれたので面白く、フライングディスクも楽しくできました。次回は直接会って楽しめたらと思います。
 - ・リモートでの交流だったので、伝わりにくいことや表情が分かりづらいとか少し不便なこともあったので、次は実際に交流して、一緒に楽しさを共有したいと思いました。
 - ・パラリンピックが終わったタイミングで体験できてとても良かったです。
 - ・障害のあるなし関係なく楽しめるスポーツに触れることができ良かったし、もっといろいろなスポーツについて知りたいと思いました。

オ) 当日の様子



第5回フライングディスク交流大会～弘大杯

東北3県をICT機器でつなぎ、オンライン競技を実施した。

- ア) 日時 令和3年12月25日(土) 9:00～11:50
- イ) 会場 弘前大学教育学部附属特別支援学校 第二体育館(本会場)
福島県郡山市体育館(サテライト会場1)
宮城県福祉センター(サテライト会場2)
- ウ) 参加者 選手42名(青森県15名、福島県11名、宮城県16名)
- エ) 日程 9:00～9:10 受付
9:10～9:30 開会式
9:30～9:55 講習会
10:00～11:40 競技
11:40～11:50 閉会式
- オ) 競技種目 フライングディスク アキュラシー競技
- カ) 参加者・大会役員の声
- ・初めてのオンライン大会。どうなるかと思いましたが、新しい形で、コロナ禍でもフライングディスクができたことをうれしく思います。参加者も大会が終わっても余韻に浸り、みんなが「またやりたい」と声をかけて会場を後にしました。(宮城県)
 - ・スタッフも保護者も選手も、交流大会を楽しみにしていました。「いつやるの?」と声をかけられました)今回は、全国大会のメンバーがたくさん出ていました。全国大会が中止となった中で、県境を越えての大会に参加できたこと嬉しく思います。また、来年もやりましょう!!(福島県)
 - ・専門家の活用で、安心して大会運営できました。(青森県)
- キ) 専門家の活用
ICT接続機器アドバイザーの協力 → 働き方改革(専門家の活用による業務の分担)
トラブル時の迅速な対応
本校教員の研修の場(今後の教育活動へつなぐ)
- ク) 当日の様子



開会式の様子

開会式の様子



練習会の様子



競技（青森会場）
の様子



表彰の様子



閉会式の様子



障害者スポーツに関する追跡調査

- ア) 期 日 令和3年9月～11月
イ) 対 象 津軽地区特別支援学校・特別支援学級に在籍する児童生徒の保護者 728名
ウ) 内 容 「津軽地区の特別支援学校・特別支援学級在籍児に対する障害者スポーツ活動への参加とそのニーズ実態調査」
平成29年度実施のアンケートと同様の項目で実施し、変容を検証した。
- エ) 結 果 付録2を参照。
オ) 考 察 本調査を通して、今後津軽地区においてスポーツ活動を推進していく上で付録2に記載してあるような示唆を得ることができた。

5 事業の成果

(成果1)

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、集合型の活動が困難である。

- ⇒ ICT機器を活用したプログラムの検討
- ⇒ 地域の小中学校等と地域の特別支援学校をオンラインでつなげたスポーツ教室の立案
- ⇒ フライングディスク交流大会～弘大杯～
- ⇒ ・コロナ禍で他校との接触が制限される中、スポーツを通じた交流が実施できた。
- ⇒ ・専門家の活用が職員の研修の場となり、新しい知識の習得につながった。

(成果2)

コロナ下への対応と、GIGAスクール構想を見据え、ICT機器に頼っていくことも必要。

- ⇒ オンラインスポーツ教室を試行
- ⇒ インクルーシブスポーツ教室（オンライン）
- ⇒ ・新たな活動形態の可能性が見えた。

(成果3)

肢体不自由の特別支援学校では、周知し参加可能な児童生徒が限定的である。医療的ケアの必要な児童生徒対応の看護師を配置するなどすれば、参加者も増えるだろう。

- ⇒ 会場に集まることが難しい方には、VRゴーグルを使用した、視聴体験やオンラインスポーツ大会開催の検討
- ⇒ VRスポーツ体験会（アウトリーチ型、集合型開催）
- ⇒ ・アウトリーチ型で実施したことで、たくさんの生徒が体験でき、経験の拡大につながった。
- ⇒ ・VRスポーツ種目を実体験することで、イメージがもてた生徒がいた。
- ⇒ ・肢体不自由の生徒が「またやりたい」「〇〇のスポーツも見てみたい」と興味や関心が広がった。

(成果4)

幼児期からの身体運動の機会を提供することをねらいとする「きっずパークとみ～の」を弘前市と共催し、馴染みのある公共施設の利用を通して、地域において行うスポーツ活動として根付かせていきたいと考えている。

⇒ 弘前市との連携強化、本校会場以外での開催

⇒ 「きっずパークとみ～の」を地域施設で開催

- ⇒ ・弘前市と共催で開催したことで、施設の借用手続きがスムーズになった。
- ⇒ ・地域の課題を共有して取り組むことができた。

6 今後の課題

今年度の4つの取組から、ICT機器を活用した取組は成果があったと考えられる反面、子供たちからは、「みんなで集まってスポーツがやりたい」という声が多く聞かれた。子供たちの声から実行委員会では、次の課題を洗い出した。

(課題1) VRスポーツの環境整備、VRを活用したスポーツ活動への般化

(課題2) オンラインスポーツイベントの可能性と普及活動

(課題3) 継続したスポーツ活動に向け、役割分担を明確にした組織作り

今後は、これらの課題を解決しながら、定期的な集合型スポーツイベントの開催も検討していく必要がある。

7 実行委員会名簿

	氏 名	所 属	役 職
1	福 沢 和 彦	青森県障害者スポーツ指導員会	会 長
2	竹 内 雅 宣	青森県身体障害者福祉センター	主 事
3	成 田 亜 弘	弘前市福祉部障がい福祉課	課長補佐
4	花 田 孝 文	弘前市健康こども部スポーツ振興課	総括主査
5	齋 藤 藍	弘前市健康こども部スポーツ振興課	主 事
6	三 國 美 香	スペシャルオリンピックス日本・青森支部	評 議 員
7	鹿 内 葵	総合型地域スポーツクラブ スポネット弘前	理 事 長
8	工 藤 直 樹	指定管理者（一財）岩木振興公社	業務主任
9	蒔 苗 隆 文	青森県特別支援学級・通級指導学級設置校長協議会 弘前支部（弘前市立千年小学校 校長）	支 部 長
10	鈴 木 匡 芳	青森県立弘前第一養護学校	教 諭
11	左 舘 泰 大	青森県立弘前第二養護学校	教 諭
12	保 村 崇 有	青森県立弘前聾学校	教 諭
13	石 田 千 里	青森県立森田養護学校	教 諭
14	神 美 聡	青森県立黒石養護学校	教 諭
15	堀 井 ちなみ	青森県立浪岡養護学校	教 諭
16	福 島 裕 敏	弘前大学教育学部	学 部 長
17	戸 塚 学	弘前大学教育学部（地域連携支援室 室長）	教 授
18	増 田 貴 人	弘前大学教育学部	准 教 授
19	本 間 正 行	弘前大学教育学部	学部長講師
20	益 川 満 治	弘前大学教育学部	講 師
21	飯 田 有知子	弘前大学教育学部	事 務 長
22	小 野 賢	弘前大学教育学部	事務長補佐
23	川 村 泰 弘	弘前大学教育学部附属特別支援学校	校 長
24	奈良岡 孝 信	弘前大学教育学部附属特別支援学校	教 頭
25	木 村 亮	弘前大学教育学部附属特別支援学校	教 諭
26	對 馬 大 成	弘前大学教育学部附属特別支援学校	教 諭
27	小石川 菜生子	弘前大学教育学部附属特別支援学校	事務部主任
28	中 嶋 実 樹	弘前大学教育学部附属特別支援学校	教 諭

付録1 リーフレット

スポーツに関する Q A

- Q1 どんなスポーツ活動がありますか？
 A1 リーフレットの QR コードを読み取ると、活動の詳細を見ることができます。
- Q1 参加するにはどうしたらよいですか？
 A1 リーフレットの QR コードから、直接関係機関に連絡するか、下記コーディネーターに問い合わせをしてください。
- Q1 参加できる対象障害種や程度を教えてください。
 A1 誰でも、どなたでも参加できます。
 お申込み時の内容から、できるだけ一人一人に合わせた支援を取り入れて、一緒に体を動かすことを楽しんでもらいたいと思います。障害がない方も大歓迎です。
- Q1 参加費はいくらですか？
 A1 参加費をいただいている活動もあります。ユニバーサルスポーツクラブは、1回200円です。

【コーディネーター】

弘前大学教育学部附属特別支援学校

〒036-8174

青森県弘前市大字堂野町1番地76

TEL 0172-36-5011 FAX 0172-36-5012

Let's Sports IN 弘前

障がいのある子も
 障がいのない子も
 生涯を通して楽しむ
 スポーツ活動！！



弘前大学教育学部附属特別支援学校

「弘前大学モデル」とは 地域と連携し

生涯を通してスポーツに取り組める環境

きっずパークとみへの



弘前大学・附属特別支援学校主催
 室内公園の様な空間
 大型遊具を使つての自由遊びの場



ねむの学生会館

特別支援学校

ユニバーサルスポーツクラブ



地域総合型スポーツクラブ主催
 大人になつてもスポーツ活動
 いろいろな種目の実施



総合型地域
 スポーツクラブ
 スポネット弘前

弘前市
 民生活部文化
 スポーツ課

スペシャル
 オリンピックス
 日本・青森支部

青森県障害者
 スポーツ指導員会

わいわいスポーツクラブ



弘前大学・附属特別支援学校主催
 地域の指導員や学生といろいろな
 スポーツを楽しみます。



弘前市

弘前大学

岩木振興公社

いわきさん 岩木山スポーツ交流大会



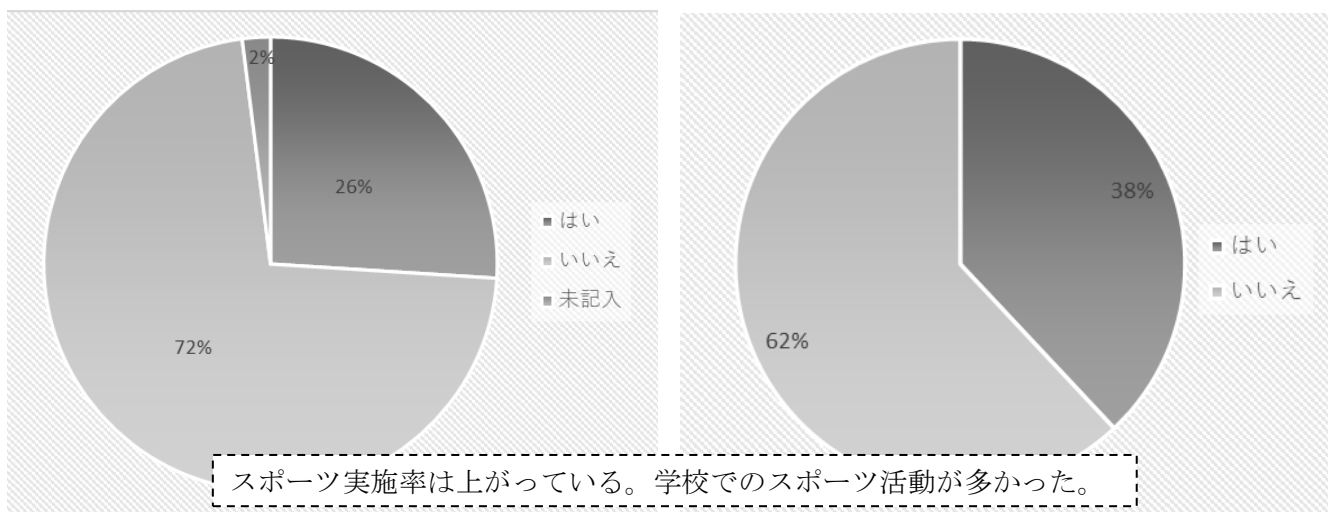
岩木振興公社主催
 だれでも・みんな対象
 地域の人とのスポーツ交流と競技大会



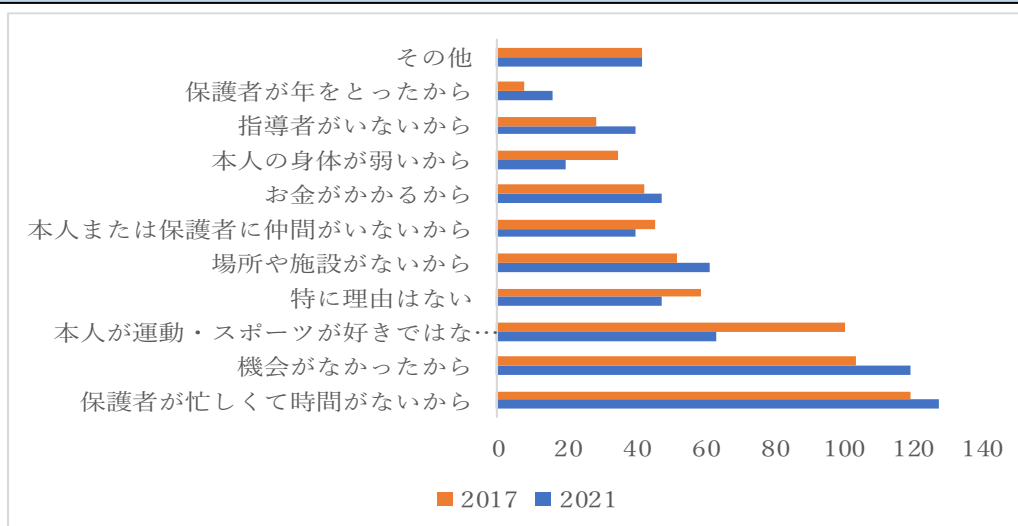
付録2 実態調査結果

【2017年度】n=504 ～5年間～ 【2021年度】n=737

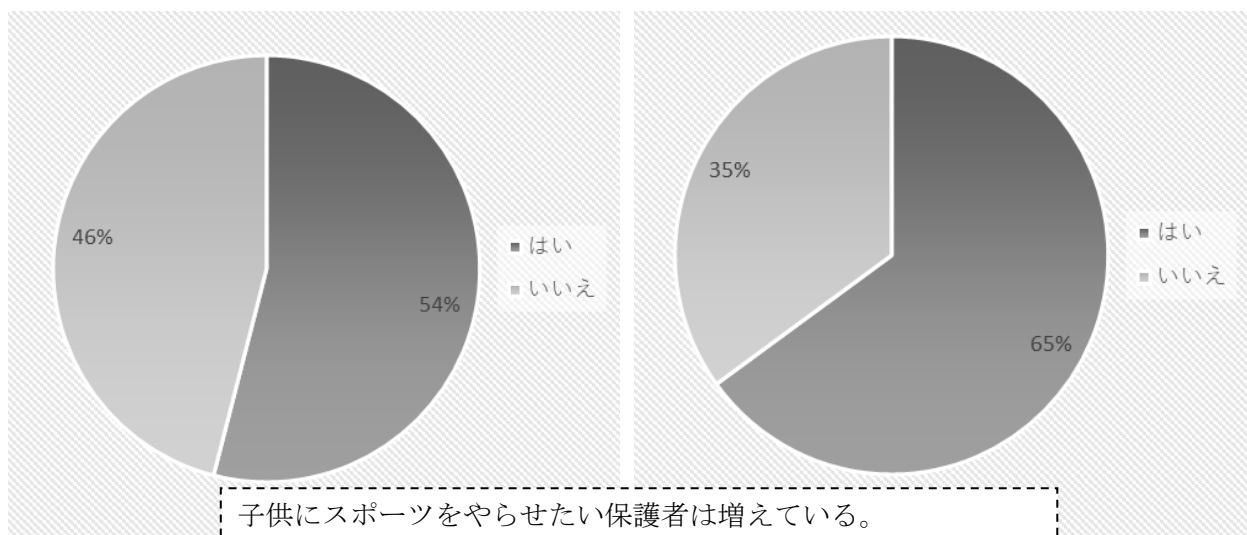
問1：スポーツ実施状況 「お子さんは日頃スポーツをしていますか？」



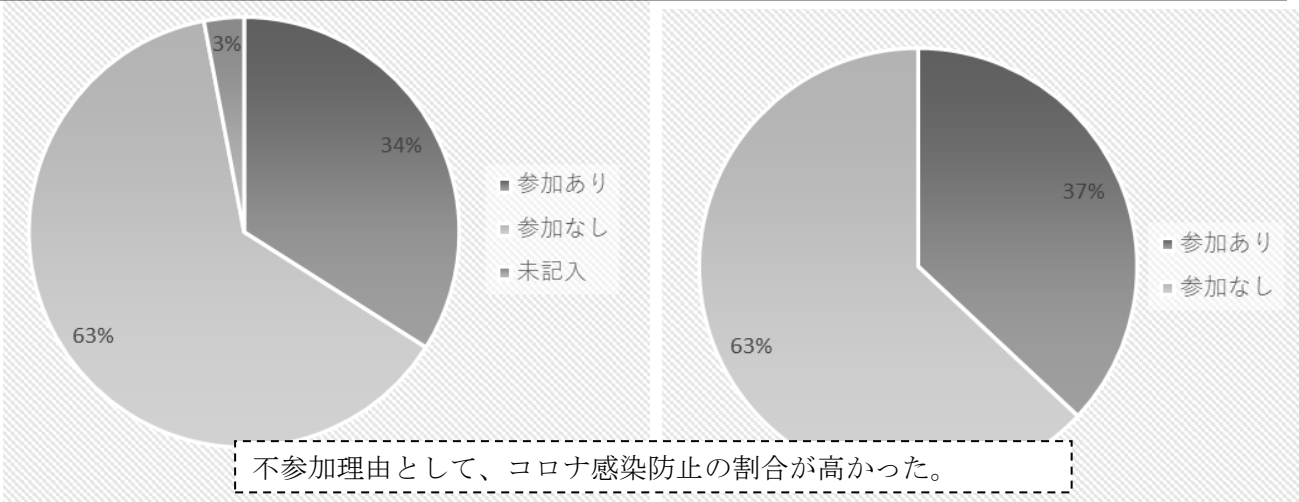
問2：「いいえ」と答えた人のスポーツをしていない理由



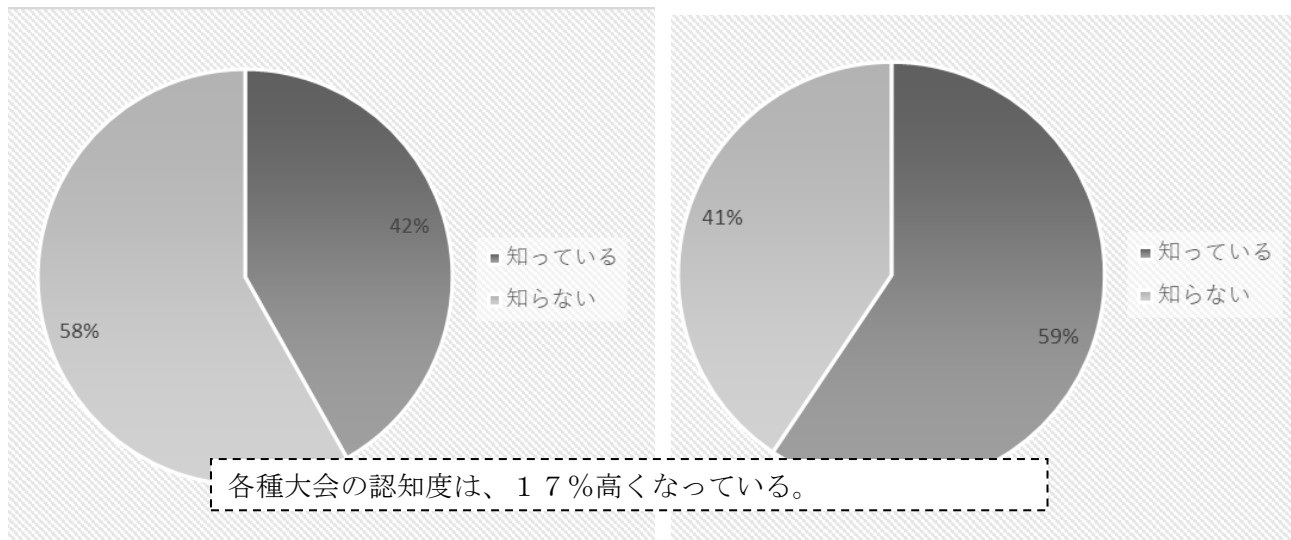
問3：「いいえ」と答えた人の中で、こどもにスポーツをやらせてみたいと思う人



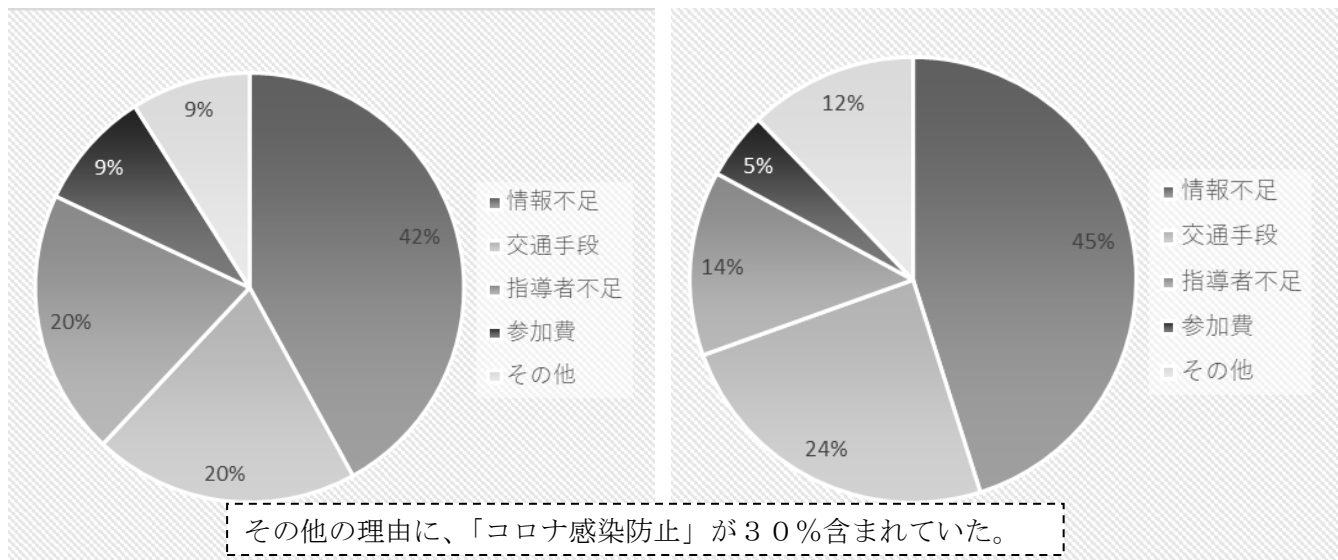
問4：スポーツ大会やイベントへの参加状況 「障害者スポーツ大会やイベントに参加したことがありますか？」



問5：障害者スポーツ各種大会の認知度 「障害者スポーツの各種大会を知っていますか？」

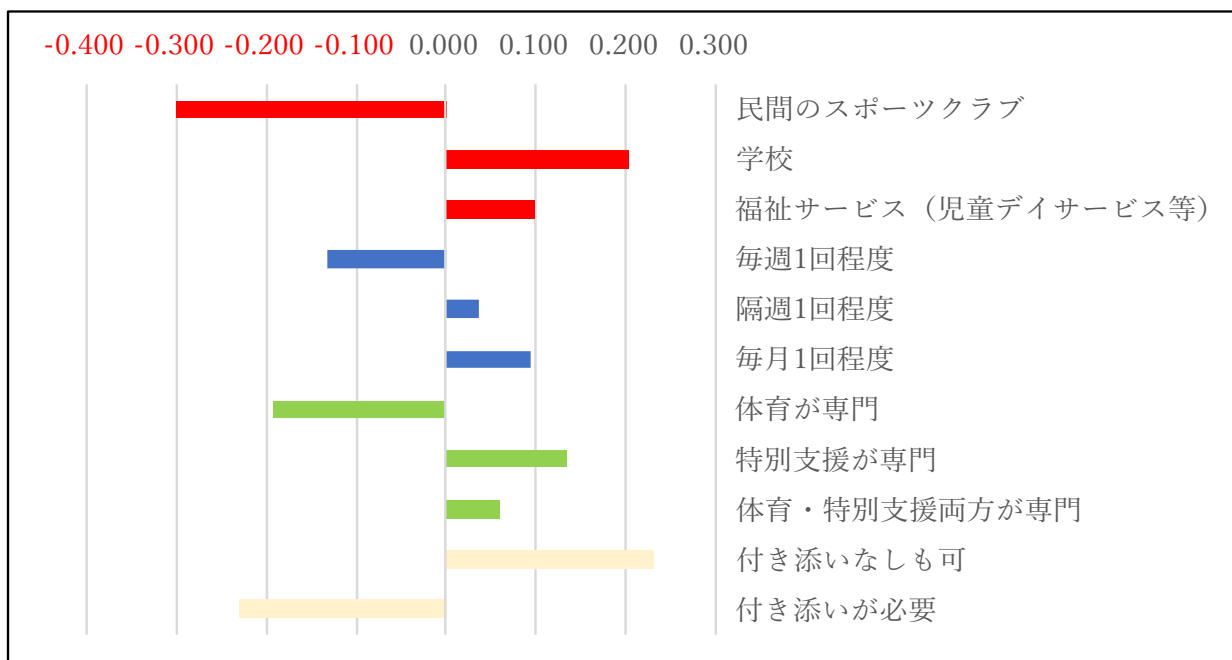


問6：障害者スポーツを行うときの今の課題

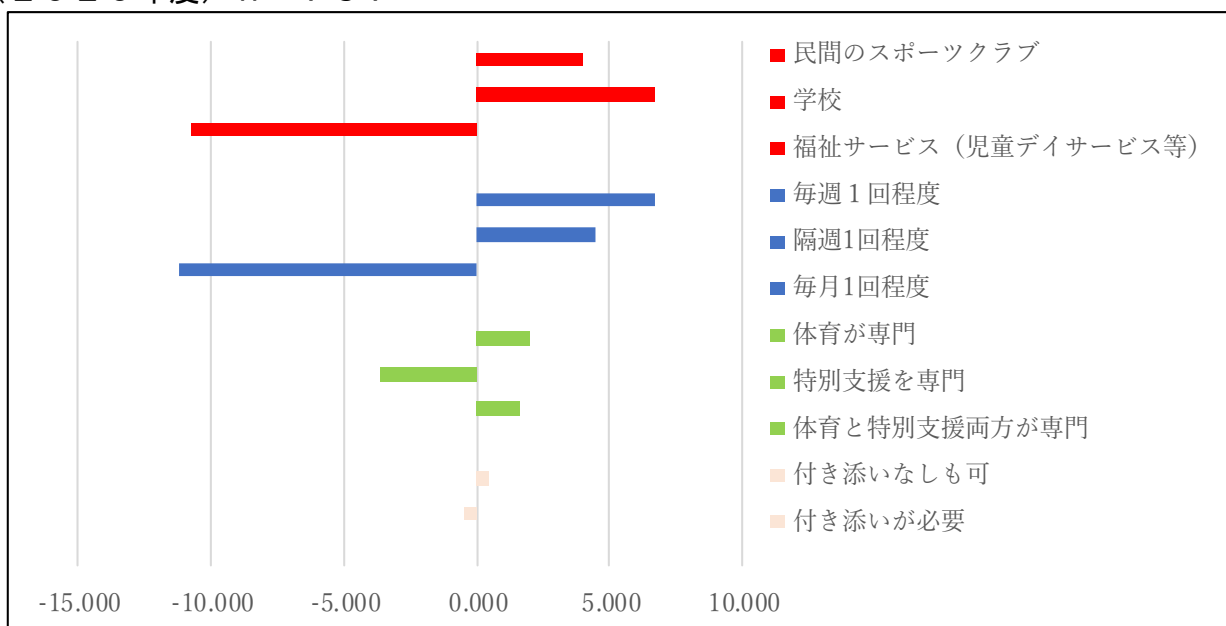


問7：スポーツ活動への参加ニーズの把握

(2017年度) n = 504



(2020年度) n = 737



- ・全体の結果としては「運営主体」を重視する傾向が高いという結果となった。
- ・前回（「運営主体」>「保護者の付き添い」>「指導者」>「会の開催頻度」）と比較して、「運営主体」重視が下がり、「開催頻度」が重視されている。
- ・児童生徒が特別支援学校在籍の場合、「運営主体」、なかでも【民間のスポーツクラブ】への期待が高まった。また「開催頻度」も【毎週】や【隔週】が高まり、指導者は【体育が専門】を重視する傾向が確認された。支援が必要な子供は、地域のスポーツ活動等への参加がまだしにくいため、一般の体育指導者が受け入れてくれる状況を求めている、そのコーディネート等を学校に期待しているのではないかと推察される。

【障害者スポーツ推進プロジェクト～地域の課題に対応した障害者スポーツの実施環境の整備事業～】事業報告概要版

2021年度スポーツ庁委託事業

障害者スポーツ推進プロジェクト

～地域の課題に対応した障害者スポーツの実施環境の整備事業～

事業報告概要版

弘前大学教育学部附属特別支援学校

2020年度の課題

- ・新型コロナウイルス感染拡大防止のため、集まっての活動が難しい ⇒ ICT機器を活用したプログラムの検討
- ・コロナ禍への対応と、GIGAスクール構想を見据え、すぐにはできなくても長期的にICT機器に頼っていくことも必要だろう。 ⇒ オンラインスポーツ教室を試行。
- ・本校は重度の子が多く、周知は参加できそうな子に限られている。医療的ケアの必要な子に看護師を配置するなどすれば、参加者も増えるだろう。⇒ 会場に集まることが難しい方には、VRゴーグルを使用した、視聴体験やオンラインスポーツ大会の方が参加の可能性が高くなると予想する。
- ・幼児期からの身体運動の機会を提供することをねらいとする「きっずパークとみ～の」を弘前市と共催し、馴染みのある公共施設の利用を通して、地域において行うスポーツ活動として根付かせていきたいと考えている。 ⇒ 弘前市との連携強化、本校会場以外での開催

1

2021年度 障害者スポーツ推進プロジェクト

ICT機器を活用した、インクルーシブスポーツ教室の開催

地域の小中学校等と地域の特別支援学校をオンラインで繋げたスポーツ教室の立案

- 【予想される効果】
- ・コロナ禍でも開催可能
 - ・障害の程度に関係なく、参加可能
 - ・地域の小中学校との繋がり

バーチャルリアリティゴーグルの活用

- 【予想される効果】
- ・コロナ禍でもスポーツ体験が可能
 - ・運動施設で運動しているかのような臨場感を体感することにより、スポーツの楽しさを経験
 - ・アウトリーチ型実施により、体験者の拡大

「きっずパークとみ～の」の地域開催

- 【予想される効果】
- ・幼児期からの身体運動の場の提供
 - ・幼児期、児童期のインクルーシブ活動

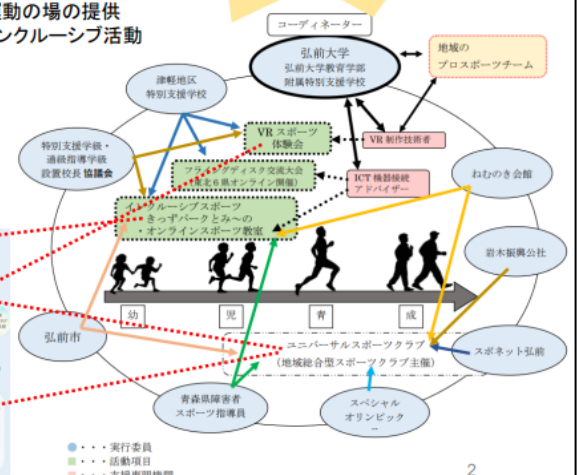
コロナ禍でもスポーツ!!
地域と連携したスポーツ!
生涯を通したスポーツ活動!

東北6県フライングディスク交流大会～弘大杯～の開催

東北6県をオンラインで繋いだフライングディスク交流大会の立案

- 【予想される効果】
- ・コロナ禍でも開催可能
 - ・県境を越えた大会の開催
 - ・移動が少ないため、普段取り組んでいる環境を大きく変えずに参加できる。

『弘前大学モデル』



2

ICT機器を活用した、インクルーシブスポーツ教室の開催

『オンラインスポーツ教室』～フライングディスク～

- ①フライングディスクの投げ方講習
- ②交流ゲーム

【本校小学部&附属小学校】 10月13日(水)
 人数 本校：1～6年生 16人
 附属小学校：3年2組 31人

【本校中学部&附属中学校】 12月10日(金)
 人数 本校：1～3年生 18人
 附属中学校：1年生 32人

【本校高等部&県立弘前実業高校スポーツ科学科】
 9月14日(火)
 人数 本校：1～3年生 19人
 弘実高校：2年生 40人

・フライングディスクはやったことがあるけど正しい持ち方は知らなかった。
 ・すごく仲良くなれた気がしました。
 ・画面の向こうで応援しました。
 ・こんな機会はなかなかなくてよかった。支援学校の人は上手でびっくりした。

・とても楽しかったです。難しいけれど、協力してディスクをゴールに入れることができました。
 ・スポーツはしょうがいに関係なく一緒に楽しめるものだと思います。
 ・フライングディスクももちろん楽しかったけれど、ディスクを投げるときにお互いに応援しあっていたところが印象に残って楽しかったです。
 ・初めて出会った附属特別支援学校の人と、少しだけ仲良くなった気がした。運動は人と人とのコミュニケーションをはぐくむ一つの手段だと改めて感じた。

・特別支援学校の生徒さんたちとリモートで会話やスポーツをするのは、絶対に難しいと思っていたので少し不安はありましたが、やってみたら意外と特別支援学校のみなさんが盛り上げてくれたので面白く、フライングディスクも楽しくできました。次回は直接会って楽しめたらと思います。
 ・リモートでの交流だったので、伝わりにくいことや表情が分かりづらいか少し不便なこともあったので、次は実際に交流して、一緒に楽しさを共有したいと思いました。
 ・パラリンピックが終わったタイミングで体験できてとても良かったです。
 ・障害のあるなし関係なく楽しめるスポーツに触れることができ良かったです。もっといろいろなスポーツについて知りたいと思いました。

ICT機器を活用した、インクルーシブスポーツ教室の開催 『わいわいスポーツクラブ～VRスポーツ体験～』

【製作動画】「サッカー」「高校生の部活動」「スキー」「一緒に遊ぼう」 *地域のスポーツ団体等に出演を依頼し制作した。

VR制作会社に動画制作を依頼 ▶ 完成度の高い動画
 ・動画の編集、ゴーグルの操作等について職員の研修の場となった。

実施期日・人数 12月25日：5人
 場所 附属特別支援学校体育館
 内容 ①VR動画視聴
 ②サッカー体験(ブランデュー弘前)

【生徒の声】

- ・終わった後、架空か現実かわからなくなるけど純粋に楽しかった。
- ・サッカーのシュートを見て、僕もやってみたらシュートが入った。
- ・画面の選手と一緒にサッカーできた。
- ・スポーツのルールがわかってきた。
- ・いろいろな目線で見て楽しかった。

楽しかった	60%
具合が悪くなった	10%
自分がスポーツして...	40%
もう一度見たい	60%

《アウトリーチ開催》



実施期日・人数 1月31日：12人
 場所 弘前第二養護学校
 内容 ①VR動画視聴

【生徒の様子】 ～肢体不自由重複障害児対象～
 ○右手が少しだけあがった。両手をバタバタはばたかせるような動きが見られた。
 ○映像が空に向かうと「あー」と声を出していた。
 ○トランポリンの映像時に足が動いていた。
 ○歩く場面、トランポリンで足をバタバタと動かしていた
 ○ゴーグルをつけて右左と首を動かして周回を見ていた。
 ○VRの中の動きに合わせて、上を見上げたり手を前に出したりするなど、実際に自分で動いているような感覚を味わっていたようだった。
 ○VRゴーグルを装着しながら、周りをグルグル映像を360度見回していた。
 ○「おーっ!!」「すーっ!!」などの感嘆の声が上がっていた。
 △初めて見る物(VRゴーグル)で不安そうにしていました。
 △装着が難しかった。

【VRゴーグルの可能性】 教員アンケートより

疑似体験への期待

階段、走れない完璧な、風を切って走るような感覚や非現実的な空を飛ぶの疑似体験ができて、楽しく学ぶことができると思っ想像力も豊かになると感じた	遠隔観戦で観るよりも、VRゴーグルで空を飛ぶの疑似体験ができて、楽しく学ぶことができると思っ想像力も豊かになると感じた	室内にいなが、外で活動しているかのような体験	体験できないことを見て感じるようになる	臨場感あふれ、たのしく活動できる	体験という形が、色々な体験ができる
スポーツに詳しくない、自分の動きや、周囲の動きがわかるようになること	スキー、水泳、遊園地など、いろいろな施設に行く体験ができる	嵐山、スキューバダイビング、車の運転、自転車、バイク、動物に近づける	体調不良等で参加できなかった校外学習等の疑似体験	雨天時でもその場に入ったような体験が可能	雨天時の対応として事前活動予定の動画を視聴

肢体不自由のある子どもたちへの利点

日常的な移動や運動が難しい子ども達の運動経験の補完	移動が難しいお子さんにとって非常に有効な手段	経験や体験が少ない生徒達
---------------------------	------------------------	--------------

課題

リアルタイムで質問できるか、内容を把握して、この動き、反応が期待できない	生徒目線本当に見ているかわからないので難しいように思う	「ゴーグル」は難しい
--------------------------------------	-----------------------------	------------

ICT機器を活用した、インクルーシブスポーツ教室の開催

『きっずパークとみへの』

実施期日・人数	①10月16日： 7人
	②11月27日： 16人
場所	③12月23日： 3人
	④⑤1月14日/2月5日 中止
	①附属特別支援学校体育館
	②③ヒロロ
	④⑤B&G海洋センター 中止

アンケート結果

【感想・自由記述より】

- ・楽しかった・また参加したい。
- ・冬は外遊びができないためこのようなプレイパークがあると親子共助かり楽しい。
- ・コロナ禍でも安心して遊ばせられる場所で、楽しめた。
- ・毎回楽しみにしています。体をたくさん動かして遊べるので子ども達は大喜びです。
- ・幅広い年齢の子と一緒に遊べる空間が貴重なので今後も続けてほしい。
- ・危険がないか心配だったが、見守ってくれる方がいて安心して遊ぶことができた。



写真：ヒロロでの活動の様子

東北6県 フライングディスク交流大会～弘大杯～の開催

『第5回フライングディスク交流大会～サテライト大会～』

実施期日	12月25日(土)
場所	附属特別支援学校体育館(本会場) 福島県、宮城県(サテライト会場)
人数	参加者：青森県15名 福島県11名 宮城県16名

【参加者・大会役員の声】

- ・初めてのオンライン大会。どうなるかと思いましたが、新しい形で、コロナ禍でもフライングディスクができたことをうれしく思います。参加者も大会が終わっても余韻に浸り、みんなが「またやりたい」と声をかけて会場を後にしました。(宮城県)
- ・スタッフも保護者も選手も、この交流大会を楽しみにしていました。「いつやるの？」と声をかけられました。今回は、全国大会のメンバーがたくさん出ていました。全国大会が中止となった中で、県境を越えての大会に参加できたこと嬉しく思います。また、来年もやりましょう！！(福島県)
- ・専門家の活用で、安心して大会運営できました。(青森県)

ICT接続機器アドバイザーの協力 → 働き方改革(専門家の活用による業務の分担)
トラブル時の迅速な対応
本校教員の研修の場(今後の教育活動への繋がり)

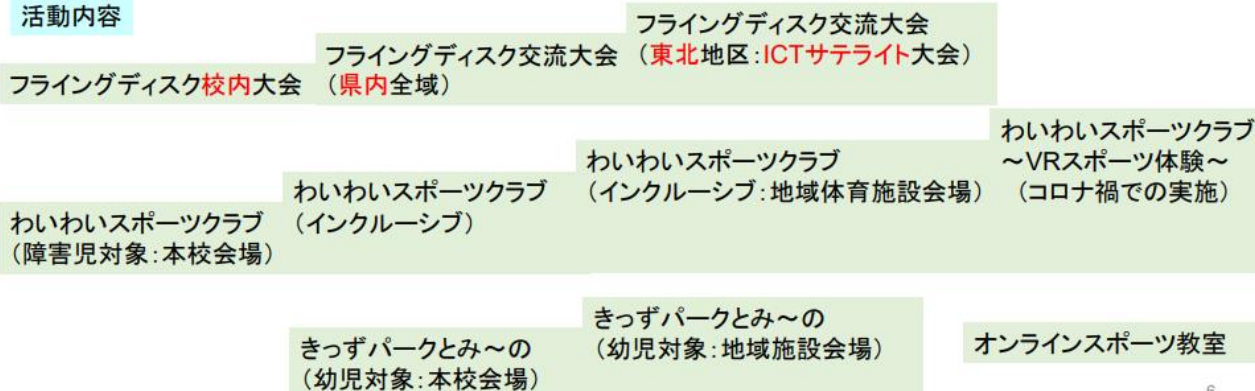
5

2021年度 障害者スポーツ推進プロジェクト 【追跡調査結果】

6年間の活動～スポーツ庁委託事業を受けて～ 【2016年度～2021年度】



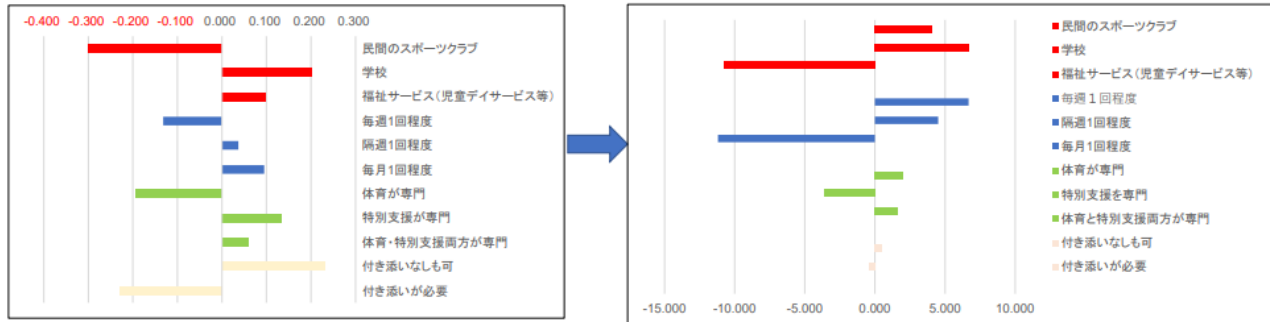
活動内容



6

2021年度 障害者スポーツ推進プロジェクト 【追跡調査結果】

6年間のスポーツ庁委託事業の変容 【2016年度～2021年度】



- ・全体の結果としては「運営主体」を重視する傾向が高いという結果となったが、児童生徒の在籍（特別支援学校か特別支援学級か）で、その傾向に明確な相違点があった。また、前回（「運営主体」>「保護者の付き添い」>「指導者」>「会の開催頻度」）と比較して、「運営主体」重視が下がり、「開催頻度」が重視されている。
- ・児童生徒が特別支援学校在籍の場合、「運営主体」、なかでも【学校】への期待が高い。また「開催頻度」も【隔週】、指導者は【体育が専門】を重視する傾向が確認された。特別支援学校在籍児にとって、地域のスポーツ活動等への参加がまだしにくいいため、一般の体育指導者が受け入れてくれる状況を求めている、そのコーディネーター等を学校に期待しているのではないかと推察される。
- ・一方、児童生徒が特別支援学級在籍の場合、「運営主体」は児童デイサービス等【福祉サービス】への期待が高く、また「頻度」も【毎週】、指導者は【特別支援を専門】を重視していた傾向が確認された。前回調査以降身体活動の重視を強く打ち出す福祉サービスも散見されるようになった背景もあって、特別支援学級在籍児にとっては、比較的地域でスポーツ等参加できる機会があるからこそ、子どもがスポーツ等指導者の多くに特別支援の見識を求めているのではないかと推察される。
- ・「保護者の付き添い」は両群とも【付き添いなしも可】を重視していたが、特別支援学級の方が強く打ち出されていた。

7

2021年度 障害者スポーツ推進プロジェクト 【成果と課題】

「実行委員会」での意見 【キーワード】定期的・障害者スポーツ指導員・連携・インクルーシブ 【インクルーシブスポーツ活動の可能性】

【地域でのスポーツ活動に期待すること】

- ・身近に感じて気軽に行けるようなスポーツ活動の場
- ・定期的にスポーツができる場
- ・共生社会の更なる実現のために、障害者と健常者がスポーツを通して交流できる場
- ・障害者スポーツ指導員を活用したスポーツ活動

【地域で連携したスポーツプログラムの提案】

- ・他団体が主催しているスポーツ教室とタイアップしての「移動スポーツ教室」（移動難の課題解決のため）
- ・地域のスポーツ団体と連携したスポーツ教室
- ・定期的な活動ができる体制作り

- ・一緒に活動することで、健常児にとっては障害者がスポーツをすることへの理解が深まるかもしれません。ただ、障害者にとっては、不快に感じることもあると聞きます。
- ・参加する者全員が楽しめるような環境とするために、運営要素やハンデの活用が必要参加対象者だけでなく、そのご家族や関係者にもインクルーシブスポーツの認識と理解を促すことも重要
- ・公共施設に常設のポッチャコート設置など、そこにいたら、その種目が楽しめるという場所づくり

インクルーシブスポーツ活動を定期的に実施 障害者スポーツ指導員の活用

地域スポーツ団体との連携したスポーツ 教室

・行政との連携 ・『みんなでインクルーシブ活動』の開催

【成果】

- ・新型コロナ感染拡大防止のため、集まってくる活動が難しい ⇒ ICT機器を活用したプログラムの検討
- ・コロナ禍への対応と、GIGAスクール構想を見据え、すぐにはできなくても長期的にICT機器に頼っていくことも必要だろう。 ⇒ オンラインスポーツ教室を試行。
- ・本校（弘前第二養護学校）は重度の子が多く、周知は参加できそうな子に限られている。医療的ケアの必要な子に看護師を配置するなどすれば、参加者も増えるだろう。 ⇒ 会場に集まるのが難しい方には、VRゴーグルを使用した、視聴体験やオンラインスポーツ大会の方が参加の可能性が高くなると予想する。
- ・「きっずパークとみ〜の」を弘前市と共催し、公共施設の利用を通して、地域において行うスポーツ活動として根付かせていきたい。 ⇒ 弘前市との連携強化、本校会場以外での開催

- ・コロナ禍で他校との接触が制限される中、スポーツを通じた交流が実施できた。
- ・専門家の活用が職員の研修の場となり、新しい知識の習得に繋がった。
- ・新たな活動形態の可能性が見えた。

- ・アウトリーチで実施したことで、たくさんの生徒が体験でき、経験の拡大に繋がった。
- ・「またやりたい」「〇〇のスポーツもみてみたい」と興味や関心が広がった。

- ・弘前市の施設の借用手続きがスムーズになった。地域課題を共有して取り組むことができた。

【課題】 VRスポーツの可能性（環境整備、スポーツ活動への繁華）、オンラインスポーツイベントの可能性と普及継続したスポーツ活動に向け、役割分担を明確にした組織作り

8